# 中野重治全集

第十四巻

# 中野重治全集

筑摩書房

中野重治全集第十四巻
一九七九年四月二十五日初版第一刷発行

著者　中野重治
発行者　関根栄郷
発行所　東京都千代田区神田小川町二ノ八
筑摩書房
郵便番号　一〇一―九一
電話　〇三(291)七六五一(営業)
(294)六七一一(編集)
振替　東京　六―四一二三
印刷　株式会社精興社
製本　株式会社鈴木製本所
装釘　栃折久美子

© 1979 Shigeharu Nakano　Printed in Japan
0393-73314-4604

第十四巻　目次

活字以前の世界

後記

著者うしろ書　五〇年代から六〇年代へかけて　六六七

解題　六七五

## 活字以前の世界


事実と解釈　三
定時制高校　七八
学問と幸福　八〇
小説散歩　一　八九
小説散歩　二　九八
小説散歩　三　一〇七
小説散歩　四　一一六
四季風俗談義　一　一二四
四季風俗談義　二　一三四
四季風俗談義　三　一四三
四季風俗談義　四　一五〇
片すみの正面　一　一五八
片すみの正面　二　一六四
片すみの正面　三　一七〇


此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

片すみの正面　四　一七七
片すみの正面　五　一八三
片すみの正面　六　一八九
異議あり　一九五
光太夫、ゴンチャロフ以来　二〇三
そろばん勘定における問題　二〇九
内の関係と外の関係　二一四
そのものとしての戦い　二一七
チャタレー裁判と北原武夫　二二四
「潮騒」と大人気のない話　二三一
無知とぼんやり　二三七
はやい話　二四〇
民主的ということ　二四一
孝行について　二五一
教師の詩　二五七
今日の文学の問題　二五九

都の住民として　二七一
選挙さまざま　二七三
「荷車の歌」と「沖縄島」とについて　二七六
いくつもの問題と一つの問題　二八三
「福竜丸」から「拓洋」「さつま」まで　二九六
朝鮮の旗　二九八
今とプロレタリア文学の時代　三〇〇
奇しきエニシ　三〇三
十一月末現在旅さきでの感想　三〇四
わが疑い　三二
教師のなかの「人間」　三四九
早春書信　三五四
男を馬鹿にするな　三六四
最近の世相と文学　三七一
朝鮮問題について　三七六
アジア・アフリカ作家会議と日本の運命　三八四

国、人の印象と大会の印象　四〇一
くつろいでいられる国　四〇六
きれぎれの印象　四〇八
フルシチョフの頭と外国語　四一〇
モスクワの作家大会とソ連のあちこち　四二四
自分に即して　四四三
対等、永久と算術　四四七
木綿でまいたギター　四五三
ゴロツキはごめんである　四五七
文学者と安保条約　四六五
奥野健男氏へお答え　四六九
テレビの上で　四七〇
岸グループと天皇グループ　四七二
女のこと　四七六
人の立場ということ　四八〇
国民感情ということ　四八三

私は疑う　四九九
ゴロツキの感覚とゴロツキにたいする感覚　五一三
広島での感想　五一五
「もりあがり」と「品位」　五三一
一どきにわかつてくるという状態　五三三
夏から秋へ　五三六
参議院議員の三年間　五四〇
村上元三氏の「一党一派に偏してはならない」説について　五四二
活字の世界と活字以前の世界　五五六
タマシイの問題　五六〇
女たちの力　五六二
テロル分子と池田内閣とのあいだ　五六三
牡丹峰劇場からの声　五七二
テロルは右翼にたいしては許されるか　五七六
花輪大臣と特高次官　五八四
おととしの話　五八八

二つの点で　五九〇
テレビとテレヴィ　五九二
細すぎる神経の問題　五九四
新日本文学会の十五年　六一一
ある状態　六一三
政府　人民　財布のひも　六一八
政治報告草案について　六二〇
新しい季節とアジア・アフリカ作家会議　六二四
大のこと小のこと　六二七
綱領草案について　六三三
松川判決をきいて　六三四
川添町通信　一　六三五
川添町通信　二　六四一
川添町通信　三　六四九
川添町通信　四　六五六
後悔さきに立たず　六六二

# 活字以前の世界

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

# 事実と解釈

## 一　言葉づかいについて

今年はじめ、私は「一九五六年の問題の一つ」という文章を書いた。今年、一九五六年にはいろいろの問題が予想されたから、そのうちの一つについて私は書いたわけであつた。そのなかで私は杉浦明平の文章にふれた。それは『新日本文学』の一月号と二月号とに発表された。すると、つづいて三月号に、「事実を見る立場の相違について」という杉浦の文章が発表された。私が杉浦にふれた点を取りあげて、それをもう少し、あるいはかなりに大きくひろげ、日本共産党の内部問題にまで網をかけての私への反駁であつた。そこには、「これなども、中野さん、おまえさんたちの仲間げんかと何か関係があつたのかい。」といつた言葉があつた。「そういうかけひきはむしろ中野の方が上手だとわたしは思つている。」といつた言葉があつた。「もちろん、新日本文学会は中野一座とはちがうものであ」るとか、「ついでに中野重治に『やにさがる』という日本語について教えておきたい。わたしはあまり人に教える機会がないので、一言つけ加えさせてもらう……このようなお茶坊主的批評を読んで腹を立てないでいる中野の状態をば『やにさがる』というのである。」とかいつた言葉もあつた。

言葉は杉浦の論旨そのものではなかつた。しかし私には不愉快であつた。それは、私に、頭がわるいとか気がきかぬとかいわれるのは仕方もないが、駆けひきをしているとか、駆けひきが上手だとかいうことは、いわれた

くないという気持ちがあつたからであつた。新日本文学会のことを世間ではとやかくいう。私のことをもとやかくいう。しかし、新日本文学会と私とを、「中野一座」といつた言葉で結びつけることはしてほしくないという気持ちがあつたからであつた。けれども、孤立無援だとか、八方から袋だたきになつているとかいわれるのは我慢もしようが、お茶坊主に取りまかれて、やにさがつているなどとは思われたくないという気持ちが私にあつたからであつた。この気持ちの底には、いくらか日本風の、壮大なヒマラヤのような喜劇によりも、日かげの花のような、じめじめした悲劇ないし悲劇まがいの方に曳かれるというありきたりのものがまじつていなかつたとはいえまい。それならば、それは末の末の問題である。私を不愉快にしたほんとうのものは、むしろ、杉浦のこういう言葉が、事柄にたいする杉浦の腹立ち、私にたいする憎悪のほとばしりとして発していなくて、はからいとして、駆けひきとして、利き目を勘定に入れてのいやがらせとして書かれていることであつた。

杉浦は、宮本百合子が必ずしも常に円満具足してはいなかつたと私が書いたのについて、「円満具足」に何度かからんだあとで書いている。

「くりかえしていうが、わたしは原則が正しければ、円満具足でなくてもいいことをみとめる態度に反対なのである。少くとも円満具足になつてゆこうという努力がみとめられないかぎり、反対なのだ。それは、目的が正しければ、手段をえらばぬ、といいかえられるからだ。これは政治運動や文学運動を陰謀ごつこに変えてしまうおそれがあり、マキアヴェリズムの独り舞台となりがちだからである。わたしが、当時の論争から感じとつたことを説明すれば、だいたい、そのようである。そしてそれは、人間的信頼の問題ともかかわりあつていた。」

いつたい、杉浦は、「中野の説明はわたしの記述が事実の正反対であることを納得させてくれなかつた。そこで、わたしじしんの記述のあいまいだつた部分を補足しながら、中野と何がくいちがつているかを明らかにし、またわたしにはつきりしない事実を中野に質問してゆきたい。」というところから「事実を見る立場の相違について」を書きだしていた。問題のこの本旨からすれば、私にたいして、「つまり生れつきか、幹部ボケにかかつ

ているか、どちらかである。」とか、お茶坊主に取りまかれてやにさがつているとか書く必要は、杉浦においては毫もなかつたのであつた。「これなども、中野さん、おまえさんたちの仲間げんかと何か関係があつたのかい。」といつたひやかしの軽い調子は、問題の性質上、出てくることのできぬものでもあつた。こういう調子は、怒りのおもむくところ、論理の必然において発したものとは見ることができなかつた。それだからそれは、私にたいして藝術的な姿でとどめのひと刺しとなることができなかつた。しかもこの調子が、「原則が正しければ、円満具足でなくてもいいことをみとめる態度に反対なのである。少くとも円満具足になつてゆこうという努力がみとめられないかぎり、反対なのだ。」という本人から、取りもなおさず、彼自身の「円満具足になつてゆこうとする努力」のあらわれとして示されたのだから私は不愉快になつたのであつた。

あるいは、もともと杉浦に、この種の問題についての基本的勘ちがいがあつたのであつたかも知れない。彼の魯迅論などからもそれは疑われる。

杉浦は、『文学』十月号の「論争における魯迅」のなかで書いている。

「上にあげたような論争であつたら〔これは、『斎藤茂吉が太田水穂と石榑茂をやつつけた論争』、『中野重治が雑談でねちねち敵に食いさがつていつたやり方』などを指して杉浦はいつている。〕じぶんの欠陥や弱点にはぜんぜんふれる要を見ない。いかにエゲツなくても、相手を叩き伏せれば足りる。いわば、戦場での合戦と同じで、勝つためにはあらゆる手段がゆるされるらしい。もちろん、魯迅は騎士道にのつとつて論争したわけではない。かれがフェアプレイは中国では時期尚早であつて、尾つぽを巻いて逃げるチンコロをあくまで追いつめ、どぶにぶちこむべきことを強調したのは有名だ。いな、じつさい、かれは売国的な軍閥政府の手先にたいして、プロレタリア文学者から民族主義者に一八〇度転向した裏切ものにたいして、その他、かれの攻撃の対象にたいして、情容赦なく、人身攻撃とみえるまで徹底的に憎悪と侮蔑とをもつてむかつた。中でも『新月』派の詩人邵洵美にたいしては一番こつぴどくやつつけている。魯迅は邵をば〔といつて杉浦はそれを紹介している。〕……たぶん、

今、この国でこのように人身攻撃にわたる文章を書いたら、ケンケンゴウゴウたる非難の埃りを浴びておもてをあげることもできないだろう。けだしりつぱな論議というものは、個人的感情ぬきで、美しい礼儀正しいことばと公平な態度とをもつてすべきだと考えられているらしいからである。」

「だがわたしは魯迅のやりかたにまつたく同感する。なぜかならば、かれは一つの問題、それが国民的な弱さにかかわり、あるいは民族解放のさまたげとなりうると感じたばあい（そう感じたからこそ、かれは取上げるのだ）、いかなる一般的問題も一般そのものとして存在するのでなく、だれか単数または複数の現実的人間に媒介されてあらわれるのであるから。かれはかれの全人間的存在をもつてその問題にぶつかるかぎり、感情ぬきで冷静公平な発言をすることができなかつたし、またよいところもあり悪いところもあるから、両方を合せて二で割るという生まぬるい折衷主義をとることができなかつたのである。それゆえ敵の全存在を憎むか嘲るかせざるをえなかつた。」

してみれば、杉浦は、魯迅が『『フェアプレイ』は時期尚早」を書いたのをみて、魯迅その人が反フェアプレイに出たものとしてこれを受けとつていたのだろうか。「今、この国で」、つまり今、この日本で、魯迅の「ように人身攻撃にわたる文章を書いたら、ケンケンゴウゴウたる非難の埃りを浴びておもてをあげることもできないだろう。」と書いているのをみれば、杉浦は、魯迅のあの種の文章を、フェアプレイでないところの、「人身攻撃にわたる文章」としてほんとうに考えているのだろうか。

けれども、事実をみれば――「事実を見る立場の相違について」とまではいわない。――その一歩手まえ、事実そのものについてみれば、魯迅こそフェアプレイの道を進んでいたのであつたことがよくわかる。あのとき、林語堂が、「改革者に対する反改革者の毒手は、これまで決して緩められたことはなかつたし、手段の悪辣さも、もはやその極に達している。改革者だけがまだ夢を見ており、いつも損をしている。」と魯迅の書いた中国の事情のもとで、改革者側にも反改革者側にも通用するようなそういうフェアプレイを説いてこれをば「奨励」した。

それは、具体的には反改革者流の「毒手」に加担することであつた。そこで魯迅が、秋瑾女史の場合、また劉百昭の「先例」をあきらかに引いて、フェアプレイ一般にではなく、林語堂の説いたほかならぬこの種のフェアプレイに反対したのであつた。中国の改革者たちが、「今後は、態度と方法とを多少とも改めることが必要である」といつた魯迅は、「よいところもあり悪いところもあるから、両方を合せて二で割れ」といつた林語堂のにせのフェアプレイにたいして、ほんとうのフェアプレイ、中国発展の歴史のフェアプレイを対置したのであつた。杉浦が「人身攻撃にわたる文章」と見た魯迅の邵攻撃は、「美しい礼儀正しいことばと公平な態度とをもつて」書かれなかつたのではなくて、「美しい礼儀正しいことばと公平な態度とをもつて」書かれたのであつた。毒にたいしては解毒剤を投じるのが人間として正しい。とびかかつてきた狂犬にたいしては、これを撲殺するのが人間として公平な態度となる。「たぶん、今、この国でこのように人身攻撃にわたる文章を書いたら、ケンケンゴウゴウたる非難の埃りを浴びておもてをあげることもできないだろう。」と杉浦はいうが、もし今、日本で、ある個人にたいする魯迅ほどの攻撃文章が出たとすれば、杉浦とは反対に、その書き手がではなくて攻撃された方こそ「おもてをあげることもできないだろう」と私は思う。

魯迅の邵攻撃は、その本質からみて決して何の「人身攻撃」でもなかつた。それは、「さまざまの筆名で、編集先生と検閲旦那の眼をごまかしつつ」書いたにもかかわらず魯迅が嗅ぎつけられ、「結局どこにどう隠れてみてもだめで、半年とたたぬうちに一層はげしい圧迫を蒙ることになり」、魯迅の「筆墨が、仮面をつけて指揮刀の下から突貫して来る英雄連中に到底敵し得ぬ」とみえたとき、しかも横あいから飛びだしてきて、この魯迅に物かげからひと太刀あびせようとした人間にたいし、退く魯迅が、退きながらのひとなぎでこれを倒したものであつた。それは本質的に個人的な「感情ぬき」の文章、中国の改革と中国の文学との「人身防衛」の文章、「人身擁護」の文章であつた。それは正しい目的にふさわしく正しい手段に訴えられ、目的と手段との合致がみごとな藝術的出来ばえをも見せたものであつた。「人身擁護」が尊ばれて「人身攻撃」が鼻つまみされるのは、「人身

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com